

I. 神は、焼き尽くす火です： ヘブル 12:29 なぜなら、私たちの神は、焼き尽くす火でもあるからです。	A. 燃やす方として、神は聖です。聖は、神の性質です。神の聖なる性質に一致しないものは何であれ、彼は焼き尽くす火として、焼き尽くします。	
	B. ダニエル書第7章9節から10節において、主の御座は火の炎であり、その車輪は燃える火であり、一筋の火の流れが彼の御前から現れ、出て来ました。この火は、神が絶対的に義であり、完全に聖であることを示しています。	
	C. 主イエスが来たのは、地上に火を投じるためでした：	<ol style="list-style-type: none"> 1. キリストの神性の栄光が解き放たれることは、地上に火を投じることでした。 2. この火は、霊の命の衝撃力、解き放たれた主の神聖な命からやって来ます。
	D. 神の七つの霊は、御座の前で燃えている七つの火のともし火です。これらの火のともし火は、神の行政を遂行するためです。	
	E. いばらやぶの中で燃えていた火は、三一の神、すなわち、復活の神でした。出3:2すると、エホバの御使いが、いばらやぶの中から火の炎の中で彼に現れた。彼がよく見ると、いばらやぶがあり、火で燃えていたが、いばらやぶは燃え尽きなかった。	
	F. 神の言葉は火であり、私たちと、私たちが信頼している多くの事物とを燃やします。	
	G. 神に仕える願いを持っている人たちは、神が、燃やし力づける、焼き尽くす火であることを認識しなければなりません。神が地上にやって来るとき、火が地上にやって来ます。神が人の中へと入るとき、火が人の中へと入って、人の中で燃えます。	
II. 神に対するあらゆる奉仕は、全焼のささげ物の祭壇からの火に基づいていなければなりません：	H. 全焼のささげ物の祭壇の上で燃えていた火は、天から下ってきました：	<ol style="list-style-type: none"> 1. この火は天から下ってきた後、祭壇の上で絶えず燃え続けました。レビ9:24 その時、火がエホバの御前から出て来て、祭壇の上の全焼のささげ物と脂肪の部分焼き尽くした。すべての民はそれを見ると、鳴り響く喜びの叫び声を上げ、顔を地に伏せた。 2. 神聖な火、すなわち、燃える三一の神によって、私たちは奉仕し、さらには自分の命を犠牲にすることさえできるようになります。
	A. 私たちが神にささげる奉仕は、全焼のささげ物の祭壇の上の火を源としなければなりません。そして私たちの奉仕は、この火が燃えることから出て来るものでなければなりません。	
	B. 神の願いは、イスラエルの子たちの奉仕がこの火に基づいていることでした。香をたくことは、神に対する彼らの奉仕でした。しかし、香をたくために用いられる火は、祭壇から取られなければなりませんでした。	
	C. 私たちの奉仕は、神の火が燃えることから出て来なければなりません。	
	D. 火が、活力の源です。私たちの奉仕が活力に満ちるようになるために、私たちの奉仕は祭壇の上の火を経過しなければなりません：	<ol style="list-style-type: none"> 1. この火が、私たちの内側の活力、推進力、衝撃力となるべきです。もし私たちがこの火を持っているなら、私たちの奉仕は、自分自身から出て来たものではなく、神から出て来たものとなります。 2. 新約の奉仕のための活力と原動力は、天の火から出て来ました。ガリラヤの漁師たちの上に入った火が、彼らの内側の活力と原動力になりました。 3. 神を愛し、自分自身を神にささげ、神のためにあらゆるものを進んで放棄し、進んで自分自身を神の御手の中に置いて碎かれる人たちの上で、この火は燃えます。
	E. 祭壇からの火が、奉仕の真の原動力です：	<ol style="list-style-type: none"> 1. 私たちの奉仕に関して神の行なう事は、彼の火を送って、私たちの内側を燃やすことです。ルカ12:49 私が来たのは、地上に火を投じるためである。それがすでに燃え上がっていたならと、私はどんなに願っていることか！ローマ12:11 熱心で怠けることなく、霊の中で燃え、主に仕えなさい。 2. もし私たちが誠実に自分自身を神にささげるなら、火が天から下ってきて、私たちを燃やします。このように燃やすことが、私たちを動かす活力となります。そして、このように燃やすことの結果が、私たちの奉仕となります。
	F. 祭壇の上の火が、力強い奉仕を生み出します：	<ol style="list-style-type: none"> 1. 全焼のささげ物の祭壇は、主イエスの十字架です。そして火は、その霊です。 2. 真の奉仕の根拠は、十字架を認識し、自分自身を十字架の上に置いて、神によって獲得され、神聖な火に私たちの内側を燃やしていただくことです。これが奉仕を生み出します。

	<p>G. 祭壇からの火を経験する人たちが、金、銀、宝石をもって建造します：<u>Iコリント 3:12</u> ところが、その土台の上に、人が金、銀、宝石、木、草、刈り株をもって建てるなら、<u>13</u> それぞれの人の働きはあらわになります。なぜなら、かの日がそれを明らかにするからです。すなわち、それは火によって現され、その火自身が、それぞれの人の働きがどんなものであるかを証明するのです。</p>	<p>1. そのような働きは、神の要素に満ちており、十字架の力を持っており、神を表現します。<u>Iコリント 1:18</u> 十字架の言は滅びつつある者には愚かですが、救われつつある私たちに、神の力です。<u>ピリピ 1:20</u> そこで、私の切なる期待と希望は、私がどんな事にも恥じることなく、かえっていつものように、あらゆる事で大胆になって、生きるにも死ぬにも、今なおキリストが、私の体において大きく表現されることです。</p> <p>2. 燃やされることを通して生み出される働きだけが、金、銀、宝石のものです。燃やされることを通して生み出されていない働きは、木、草、刈り株のものです。</p> <p>3. それぞれの人の働きが火によって試される日がやって来ます。もし私たちの働きが火から出て来たものであるなら、私たちの働きは火のテストに耐えるでしょう。</p>
<p>Ⅲ. 私たちは、異火をもって神に仕えてはならず、祭壇からの火をもって神に仕えなければなりません：</p>	<p>A. 予表によれば、祭壇の上で燃えている火以外の火は、すべて異火です。</p> <p>B. ナダブとアビフの失敗は、彼らが祭壇の火を用いなかったことにあります。</p> <p>C. 異火は、自己の火であり、魂の命、肉的な命、天然の命から出て来る火です：<u>レビ 9:24</u> その時、火がエホバの御前から出て来て、祭壇の上の全焼のささげ物と脂肪の部分焼き尽くした。すべての民はそれを見ると、鳴り響く喜びの叫び声を上げ、顔を地に伏せた。<u>6:13</u> 火は祭壇の上で絶えず燃え続けさせなければならない。それを消してはならない。<u>マタイ 16:24</u> それから、イエスは弟子たちに言われた、「だれでも私について来たいなら、自分を否み、自分の十字架を負い、私に従って来なさい。<u>25</u> なぜなら、すべて自分の魂の命を救おうとする者はそれを失い、すべて私のために自分の魂の命を失う者はそれを見いだすからである。<u>26</u> 人が全世界を手に入れても、自分の魂の命を失ったなら、何の益があるだろうか？人は自分の魂の命と引き換えに、何を与えることができるだろうか？</p> <p>D. ナダブとアビフが裁かれたのは、彼らが神のためでない事を行なったからではなく、彼らが天然の命にしたがって行動し、天然の方法で神のために事を行なったからです。</p> <p>E. 神は、火があるかないかに注意を払うだけでなく、その火の源と性質にも注意を払います。私たちの熱心は、祭壇から来なければなりません。</p>	<p>1. 異火とは、自己の命が神の働きに干渉することを意味します。</p> <p>2. 働きは神のものです。自己の命は、この働きが遂行される方法を主張しようとします。</p> <p>3. 異火をささげることは、神への奉仕において、自己の方法や知恵を用いて、自己の提案を主張することです。</p>
<p>Ⅳ. もし私たちが神に仕えようとするなら、その霊を消すべきではなく、私たちの霊の中にある神の賜物を燃え立たせ、霊の中で燃えているべきです：<u>Ⅱテモテ 1:6</u> こういうわけで、私があなたに思い起こさせたいのは、私の按手を通して与えられているあなたの内にある神の賜物を、再び燃え立たせることです。<u>7</u> というのは、神が私たちに賜ったのは、臆する霊ではなく、力と、愛と、冷静な思いとの霊であるからです。</p>	<p>A. <u>Iテサロニケ第5章 19節</u>の「消してはいけません」という言葉は、火を暗示します：</p> <p>B. 私たちの霊の中には火があります。そして私たちは、私たちの霊を燃え立たせる必要があります：</p> <p>C. もし私たちがその霊を消さず、私たちの霊を燃え立たせるなら、私たちは霊の中で燃え、主に仕えるでしょう。</p>	<p>1. その霊は、私たちの内側で燃えています。</p> <p>2. その霊は、私たちの霊を燃やし、私たちの賜物を燃え立たせるのですから、私たちはその霊を消すべきではありません。</p> <p>1. <u>Ⅱテモテ第1章 7節</u>の霊は、聖霊によって再生され内住された、私たちの人の霊を指します。<u>ヨハネ 3:6</u> 肉から生まれるのは肉であり、その霊から生まれるのは霊である。</p> <p>2. 神の賜物を燃え立たせることは、私たちの再生された霊と関係があります：</p> <p>a. 私たちの賜物を燃え立たせることは、私たちの霊を燃え立たせることです。</p> <p>b. 神が与えてくださった私たちの霊は、私たちが燃え立たせなければならないものです。私たちは、私たちの霊を燃え立たせなければなりません。なぜなら、霊の賜物は、私たちの霊の中にあるからです。</p> <p>c. 私たちの霊を燃え立たせたいなら、私たちは自分の口を開き、自分の心を開き、自分の霊を開いて、主の御名を呼び求める必要があります。<u>ローマ 10:13</u> なぜなら、「主の御名を呼び求める者はすべて救われる」からです。</p>

経験

①火は主からです。主はこの火を地上に投じます。この火は福音でもあります。それによって私たちは奉仕し、迫害に耐え、さらには自分の命を犠牲にすることさえできるようになります。個人的な面で、火は絶対に私たちの献身にかかっています。私たちが祭壇の上でささげる献身の量は、火の強さを決定します。もし献身が欠けているなら、火はやって来ません。ですから、私たちは献身において何も保留することはできません。

新約の奉仕のための活力と原動力は、人に、すなわちガリラヤの漁師たちに起源があったものではありません。新約の奉仕のための活力と原動力は、天の火から出て来ました。ガリラヤの漁師たちの上へ下った火が、彼らの内側の活力と原動力になりました。ペンテコステの日の後、彼らは神のために語り、福音を宣べ伝え、罪人たちを救い、諸召会を設立しました。弟子たちは彼らの働きへの力の源ではありませんでした。その力の源は天でした。すなわち、力は天から下った火から来ました。結婚生活編: ビジネス・パーソンは転職することができ、学生は学部や大学を途中で変えることができます。しかし、キリストと召会の結合を示す結婚は、例外(死別、不品行、信仰から完全に離れ去ること)を除き、その結合を解くことはできません。結婚生活には、天からの火によって、燃え続ける霊がなければなりません。この霊は力と、愛と、冷静な思いの霊です。配偶者には、さまざまな欠点、弱さ、悪い生活習慣などがあります(このことはあなたも同じです)。あなたは配偶者のこれらの欠点にもかかわらず、彼または彼女を受け入れ、愛し続け、結婚の結合を保持し続けなければなりません。このことは燃える霊に依存しており、そして燃える霊はあなたの献身に依存しています。献身が弱いと霊が冷たくなり、霊が冷たいと愛は継続できません。したがってあなたは献身を更新し、霊を燃やし、最後まで夫婦の愛を維持することでキリストと召会の証しを担って下さい。

②異火とは、自己の命が神の働きに干渉することを意味します。働きは神のものですが、自己の命は、この働きが遂行される方法を主張しようとし、異火をささげることは、神への奉仕において、自己の方法や知恵を用いて、自己の提案を主張することです。異火は、私たちの奉仕という香において神の承認を得られず、私たちを主の御前で死なせます。「アロンの子たち、ナダブとアビフは、それぞれ自分の香炉を取って、火をそれに入れ、香をその上に盛って、異火をエホバの御前に献げた。それは、エホバが彼らに命じておられなかったことである」(レビ 10:1)。これは、神にささげられた人の天然の熱心、天然の愛情、天然の強さ、天然の能力を表徴します。ナダブとアビフが裁かれたのは、彼らが神のためでない事を行なったからではありませんでした。彼らが裁かれたのは、天然の命にしたがって行動したからです。彼らは神のために事を行ないましたが、それを天然の方法で行ないました。

…私たちは、天然であることから霊的であることへ、十字架の道を取ることで前進します。天然の命の中で私たちであるものは何であれ、十字架につけられるべきです。天然の人はキリストと共にすでに十字架につけられました。今や私たちはクリスチャン生活と歩みの中で、自分の天然の人が十字架につけられており、放棄されなければならないという態度を保持する必要があります。

奉仕編: 召会の奉仕において、あなたの天然の能力は死を経過しなければ役に立ちません。十字架を経過したあなたの能力は復活の中で引き上げられ、強められ、召会建造のために役に立つようになります。ナダブとアビフは天然の熱心さ、天然の才能に頼って異火をささげたので、彼らは滅びてしまいました。天然の能力に頼る人は、神と兄弟姉妹と交わらず、神に信頼しないので、その結果は高ぶりであり、高ぶりの結果は分裂と破壊です。あなたは召会生活に自分の意見、天然の愛情を持ち込むことを恐れなければなりません。

I ペテロ 5:5 同じように、若者たちよ、年長者たちに服従しなさい。またあなたがたはみな、互いに謙そんの帯を締めなさい。なぜなら、神は高ぶる者に敵対し、へりくだる者に恵みを与えられるからです。6 ですから、神の力ある御手の下にへりくだらなさい。それは時至って、彼があなたがたを高く上げてくださるためです。

③クリスチャン生活はその霊によって靈感を受け、かき立てられる生活です。一日を通じて私たちはその霊が私たちに靈感を与え、かき立て、私たちの内側で行動し活動しているのでなければなりません。ですから、その霊を消すのではなく、私たちの内側にある炎を燃え立たせる必要があります。「消す」という言葉は火を暗示しています。その霊は私たちの内側で燃えています。私たちはこの火を消すべきではなく、それを炎へと燃え立たせるべきです。II テモテ 1:6 こういうわけで、私があなたに思い起こさせたいのは、私の按手を通して与えられているあなたの内にある神の賜物を、再び燃え立たせることです。7 というのは、神が私たちに賜ったのは、臆する霊ではなく、力と、愛と、冷静な思いとの霊であるからです。

ビジネス・ライフ編: II テモテ 1 章 6 節で、「神の賜物を再び燃え立たせる(to fan into flame the gift of God)」と言っています。これは薪や炭を燃やすときに、うちわで扇ぎ風を送ることで燃え立たせるようにすることを言っています。あなたは神の賜物、力と愛と冷静な思いの霊を燃え立たせるために、あなたの霊を扇ぎ、炎へと燃え立たせる必要があります。ビジネスの様々な困難な状況において、あなたは短気を起こしたり、落胆したり、つぶやいたりせず、絶えず神の賜物を炎へと燃え立たせるべきです。落胆したまましていると、あなたは霊を消してしまいます。ビジネス・ライフにおいて霊が消えないように気を付けるだけでなく、兄弟姉妹と共に祈ったり、交わったりすることで、あなたの霊を炎へと燃え立たせることを学んでください。

910 望みと備え—キリストの再来のために用意する

1. ともし火にあぶら持ち
われら日々燃える！
主よ、われら霊にもどる、
あぶらを絶やさずに。
おお主！アーメン！ハレルヤ！
われら日夜燃える！
おお主！アーメン！ハレルヤ！
いま霊にもどる！
2. うつわにあぶらそなえ、
主の再りんを待つ。
ともし火を消さぬよう、
ぜんそん在満たせや。
おお、主イエス、満たせや！
まい時さらに満たせ！
おお、主イエス、満たせや！
実さいで満たせ！
3. 主の日まで燃えつづけ、
主に会うにいたる。
ともにこん宴にはいり、
つねに燃えかがやく。
主、はやく来ませや！
つねに燃えかがやく。
主、はやく来ませや！
はなよめ歓喜す。

中補 912 我們燈裡有油

1. 我們燈裡有油，靈裡焚燒，
我們燈裡有油，今朝！
主，不斷使我們 轉到靈裡，
使油源源不絕，燈不熄。
哦主！阿們！阿利路亞！
我們晝夜焚燒，燈不熄！
哦主！阿們！阿利路亞！
不斷轉回到靈裡！
2. 但我們的器皿必須有油，
你來時纔不致蒙羞。主，
浸透我們魂每一角落，
好叫我們全人滿了油。
哦！主耶穌，充滿我們，
每時每刻賜下你自己！
哦！主耶穌，浸透我們，
使我們滿了實際。
3. 滿了油纔能殼不斷焚燒，
直到主那一日來到。
我們要與新郎一同坐席，
光明燦爛歡然渡佳期。
主阿，快來！主阿，快來！
來看我們充滿且發光；
主阿，快來！主阿，快來！
接你佳偶永同享！

E1308 We have oil in our lamps—we are burning

1. We have oil in our lamps—we are burning!
We have oil in our lamps today!
To the spirit, O Lord, keep us turning,
Keep us turning, turning all the way!

O Lord! Amen! Hallelujah!
We are burning, burning every day!
O Lord! Amen! Hallelujah!
Turning, turning all the way!
2. But our vessels need oil for Thy coming;
We must gain a reserve supply.
So our vessels we give for the filling
That our lamps may never, never die.

Fill us, Jesus! Fill us, Jesus!
Every moment give us more of Thee!
Fill us, Jesus! Fill us, Jesus!
Fill us with reality!
3. Then we'll burn till the Lord comes to meet us,
Then we'll burn till He comes that day.
Then we'll go in with Him to the wedding
And be brightly burning all the way.

Come, Lord Jesus! Come, Lord Jesus!
Come and find us filled and burning bright!
Come, Lord Jesus! Come, Lord Jesus!
Come and in Thy Bride delight.